

第15回 ちゅうでん教育振興助成（平成27年度）

報告書資料 一般-27

学校名・団体名	魚沼市立堀之内小学校
HPアドレス	http://www.horsh.edu.city.uonuma.niigata.jp/index.html
コース	学校支援
活動・研究テーマ	主体的に課題解決に取り組む子の育成 ～共に聴き合い、高め合う集団づくりを土台にして～
〈活動・研究の意義、目的〉 子どもが「分からないことを『分からない』と言える」「分からない仲間を放っておかない」関係の見られる温かい学級づくりと、それを土台とした授業づくりの両面に取り組む。自分を堂々と開示できる環境の中で、子どもは安心して間違えることができ、安心して仲間に助けを求めることができる。このような子ども同士のつながりを、「聴き合う」という視点から見つめ、実践研究を進めていく。困難な状況に対してくじけることなく、恒常的に仲間と追究する姿が見られるようにするため、自他を大切にする人間関係づくりの構築と、「やってみたい」「解決してみたい」と子どもの意欲を喚起するような授業づくりに取り組んでいく。	

<活動・研究報告> (時期、内容、成果や子どもたちへの効果などを記入。A4用紙1~2枚でおまとめください。)

本研究は、目の前の子どもの姿からスタートした。全職員で子どもの姿を語り合う中で、「難しい課題に対して消極的である」「現状に満足している」という姿に見える子どもが、実は、「もっと分かりたい」「もっと仲間を大切にしたい」「自分を高めたい」と思っていることに改めて気付いた。

そこで、私たちは、「分からないことを『分からない』と言える」「分からない仲間を放っておかない」関係の見られる温かい学級づくりを目指して取り組んできた。そこには、自他を大切に作る人間関係が欠かせない。自分を堂々と開示できる環境の中で、子どもたちは、安心して間違えることができ、安心して仲間を助けを求めることができる。私たちは、このような子ども同士のつながりを、今年度は、特に「聴き合う」という視点から見つめることとした。

その姿が授業の中で具現化されるためには、「やってみたい」「解決したい」と子どもの興味・関心を引きつけるような授業づくりが必要である。そして、子どもが、学習に取り組むために必要な既習事項(道具=ツール)を身に付けていることも必要である。私たちは、「課題設定・提示の工夫」「既習事項の定着の確認と事前指導(サビ落とし)」に焦点を当てて授業改善に努めてきた。

このように、学級集団づくりと授業づくりを重ね合わせながら研究を進め、課題の解決に向けて、仲間とともに解決に向けて追究することが楽しいと実感する子どもの育成が、学力の向上には必要だと考えている。

◇ 外部講師を招いての校内研修

本研究を進めるに当たり、外部の専門家の理論的裏付けを得ながら取り組むこととし、以下の期日にご来校いただいた。授業づくりに関しては、上越教育大学教職大学院 松沢要一教授、学級づくりに関しては、高知大学教育実践総合センター 鹿嶋真弓准教授、全校ソーシャルスキル教育に関しては、魚沼市教育委員会 伊佐貢一統括指導主事からそれぞれ指導を仰いできた。

- ・ 4月27日(月) 松沢要一教授
- ・ 4月28日(火) 鹿嶋真弓准教授
- ・ 8月28日(金) 松沢要一教授
- ・ 9月7日(月) 鹿嶋真弓准教授
- ・ 9月18日(金) 伊佐貢一統括指導主事
- ・ 9月29日(火) 伊佐貢一統括指導主事
- ・ 10月16日(金) 松沢要一教授
- ・ 10月20日(火) 伊佐貢一統括指導主事
- ・ 11月4日(水) 伊佐貢一統括指導主事
- ・ 11月9日(月) 伊佐貢一統括指導主事
- ・ 11月13日(金) 伊佐貢一統括指導主事
- ・ 11月18日(水) 伊佐貢一統括指導主事
- ・ 11月25日(水) 伊佐貢一統括指導主事
- ・ 11月26日(木) 伊佐貢一統括指導主事
- ・ 11月27日(金) 伊佐貢一統括指導主事
- ・ 11月30日(月) 伊佐貢一統括指導主事
- ・ 12月2日(水) 伊佐貢一統括指導主事
- ・ 12月3日(木) 伊佐貢一統括指導主事
- ・ 12月4日(金) 伊佐貢一統括指導主事
- ・ 12月7日(月) 伊佐貢一統括指導主事
- ・ 12月8日(火) 伊佐貢一統括指導主事
- ・ 12月9日(水) 伊佐貢一統括指導主事
- ・ 12月10日(木) 松沢要一教授、伊佐貢一統括指導主事
- ・ 12月14日(月) 松沢要一教授、鹿嶋真弓准教授、伊佐貢一統括指導主事

◇ 元気朝会・絆タイム

対人関係は、体験でしか学べないと言われている。しかし、今日、日常生活の中で体験を積む機会が少なくなっている。そこで、全校一斉によるソーシャルスキル教育を月1回計画的に実践(「元気朝会」)した。子どもにとって現実味のある場面を設定し、教師による言語的教示で「大切なことだ」と考えさせた後、教師が好ましい例と好ましくない例のモデルを示す。

次に、日常生活で同じような場面に出会ったときに自信をもって関わるができるように、学級単位でリハーサルを行う(「絆タイム」)。その際、学年の発達段階うい踏まえたプログラムを構成し、学習したスキルを日常生活の様々な場面や人に対して実践できるようにする。

◇ つなぐタイムの創設

単に言葉だけの交流ではなく、言葉の奥に込められている思いや感情までも受け止めた上での交流が、私たちの目指す「聴き合い」の姿である。なぜなら、人は、誰でも自分の伝えたいこと、そのことを発信している自分そのものを受け止めてもらえることに嬉しさや充実感を感じるからである。

私たちは、研究の過程で、他者を受容しながら聴く聴き手を育てるとともに、自分の思いや考えを表現しようとする話し手を

育てる必要性を感じた。それを具現化した取組が「つなぐタイム」である。

週1回、学級単位で仲間の話を傾聴することを通して、自他の見方、考え方の違いを知り、自分の見方、考え方を確立しながら、高め合う集団づくりに必要な心を耕していく時間とした。実施するに当たって、共通理解したことは次のとおりである。

- ・教師自ら子どもの話を傾ける。最後まで聴く。発言者の全てを受け止める。
- ・机の配置等は定めない。
- ・発言のルールは各学級で定める(挙手してから話す等)。
- ・子ども同士が「つなぐ」ことができない場合は、教師がつなぎ役になる。子どもに「話さなければよかった」という感情を決して持たせないよう配慮する。
- ・子どもが黙ってしまい、沈黙の時間が流れても、子どもはそれまでの話を聴いて、自分なりに咀嚼している場合もある。「沈黙時にこそ待つ」という姿勢を持つ。

◇ 授業実践

温かい学級づくりを土台に学力向上を図る取組の視点として、共に聴き合い、高め合う集団づくりが欠かせないと捉え、元気朝会、絆タイム、つなぐタイム等を核にしなが、子どもが所属感や自分の発言や存在が集団から認められているという安心感が持てるよう取り組んできた。

授業づくりについては、算数科に絞り取り組んできた。算数は系統性が重視される教科である。既習事項は、本時の学習内容の定着を図るために必要な「道具」として捉えている。しかし、その道具が錆びてしまえばいい仕事はできない。私たちは、単元前にプレテストを実施し、必要な基礎・基本の定着状況の(錆び付き具合)を把握し、事前に錆び落としをする場を設ける。そして、錆を落としした道具を持って学習に臨ませた。

◇ 研究会当日

12月14日(月)、県内外から約230名の教職員や保護者が参加を申し込み、研究会を開催した。主な日程は、以下のとおりである。

- ・ 9:10～ 9:20 オリエンテーション
- ・ 9:30～ 9:50 元気朝会(全校一斉 体育館)
- ・ 10:00～10:30 絆タイム(全学級)
- ・ 10:35～10:50 つなぐタイム(全学級)
- ・ 11:15～12:00 公開授業(2年松組, 6年竹組)
- ・ 12:00～13:00 昼食
- ・ 13:00～13:20 全体会
- ・ 13:20～14:50 パネルディスカッション
パネリスト 上教大 松沢要一教授
高知大 鹿嶋真弓准教授
魚沼市教委 伊佐貢一統括指導主事
堀之内小 阿部直樹教諭(授業者 教職17年目 6学年担任)
今村綾乃教諭(授業者 教職17年目 2学年担任)
廣川沙織教諭(教職5年目 2学年担任)
澤田直明教諭(教職3年目 6学年担任)
笛木淳平教諭(教職2年目 4学年担任)
- コーディネーター 堀之内小 大島一英教頭
- ・ 15:00 閉会

◇ 成果と課題

研究を進める中で、「聴き合い」に関する議論が深まるにつれ、議論の焦点を明確にして取組の方向を明確にする必要が出てきた。そして、研究テーマの変更することとなった。しかし、思い切って変更したことで、目指す方向が明確になり、「つなぐタイム」に創設を生み出すことにもつながった。聴くことが子ども同士の相互理解につながり、温かな雰囲気を作り出すことができた。また、聴くということが活動の土台であり、そこから集団づくりができた実感する職員が多かった。

「つなぐタイム」の実践を通して、「つなぐタイムを楽しみにしている子どもが多い」という声が職員から多く聞かれた。その要因として、

- ・聴き合うことの心地よさを味わうことで自己開示をするようになった。
- ・互いの話をじっくりと聴き合う場と時間が確保されている。
- ・自由に自分の思いを伝える場が毎週必ず設定されている。
- ・子どもに「聴こう」という意識が芽生えてきた。

ことが考えられる。相手に関心を持って聴くということは、相手を大事にすることだということを、職員自身が気付き学んだ。すると、必然的に授業の中でも聴き合うことを大切にしようという意識をもって授業に臨むようになり、授業改善にもつながった。

聴き合うことは、あくまでも集団であり目的ではない。私たちは、そのことを改めて肝に銘じた実践を積み重ねることが必要である。職員間で議論しているときに、どのような姿が見られたとき、私たちは「子どもが高め合っている」と捉えるといいのか、不明確な面が見られる。目指す子どもの姿を具体的に描き、子どもが自他を大切にしている人間関係の中で、安心して自己開示しながら学習できるようにしていかななくてはならないと感じている。